

大陸（北支）

北支那の分哨勤務

兵庫県 柴原 幾太郎

私は、大正十（一九二一）年一月五日に、和田山町安井に柴原家の次男として生まれた。長男は二歳の時に夭折した。妹が一人、弟が一人の三人兄弟だった。

その時両親は健在で、五〇アールの田を耕していた。その他、家で食べる野菜類を四季に応じて作っていた。

母は私が十歳の時に死亡した。妹が六歳、弟が四歳の時である。父は私達が可哀想だと思ったの

か、再婚もせず、農業と家事に一生懸命に働き私達三人を育ててくれた。

小学校を卒業するとすぐ家業につき父の手伝いをした。また人づてに青年学校に入学、そこで復員した兵から初歩の徒歩訓練から銃剣術、射撃訓練を習った。青年学校に昼間と夜間があったが昼間の部に入った。

十六歳の時江の島（瀬戸内海にある小都市）の酒屋へ友達と一緒に奉公に出た。一月半ぐらい働いた時家から「チチ、キトク」の電報が届いた。急性肺炎とのことだった。数日の暇をもらい急いで帰京した。看病の甲斐もなく父は二日後永眠した。昭和十二（一九三七）年十二月のことである。

妹と弟と私の兄弟三人が残された。一時途方にくれたが五〇アールだけ三兄弟で耕した。私が十八歳に成長した時、四〇アールを返して貰い百姓に専念した。

昭和十六年六月、孤児家庭にも容赦なく徴兵検査の通知がきた。検査場所は和田山の町役場である。検査の結果は『第二乙種』合格であった。山に入り仕事中に妹が召集令状を持ってきた。昭和十七年の三月のことである。

妹も弟も大きくなり、二人で力を合わせれば、何とか農業もやっていけそうだと肩の荷が少し軽くなったような気がした。

四月一日、姫路師団歩兵第四十六部隊の第二中隊に配属になった。和田山からの同年兵は全く私一人だけだった。

勇猛なる姫路師団の初年兵教育を三カ月間みっちり受けた。初年兵教育終了後、八月まで姫路にいた。初年兵全員が兵庫県人で何かと都合がよかった。

毎朝、点呼後、姫路城一周の駆足があった。三、四キロメートルはあったと思う。この時ほど青年学校での訓練を有難く思ったことはなかった。

弟が体を悪くしたので一期の検閲後、外泊許可を貰い家に帰った。思ったよりたくましくなっていたので安心した。この辺では耕運機はなく牛耕であるので、牛の世話が面倒だった。肉牛の且馬牛は飼育が全然別である。

七月に一期の検閲が済み、初年兵全員が北支へと出陣した。私は二カ月遅れて部隊の後を追いかギ(地名)の第三十九連隊に合流した。九月に北京に到着、セイケイ(地名)の連隊本部に合流した。セイケイから四キロ程離れたところにトウスイという大きな部落がありそこにトーチカ陣地がある。一個中隊が駐屯して警備にあたっていた。トウスイの中隊から一個分隊、常にトーチカ陣地の警備についていた。

粘土づくりのトーチカで寒気が厳しい。二階建てのトーチカで、その中で寝起きできるような設備になっていた。水がなく、部落から毎朝、水の補給を受けていた。ドラム缶に満杯にし、入浴も二日ないし三日に一度はできた。日中はよいが夜間の冷えこみは予想外だ。

トーチカの周囲を二十四時間中、巡回するが夜中はさすがに緊張する。ビール壘は、夜トーチカの中でも割れてしまう。余りの寒さに、防寒具を着て寝たこともしばしあった。

五日または一週間に一度は部落を巡回する。八路軍の勢力範囲と聞いていたが、平和な部落で一度も攻撃を受けたことはない。

糧秣は十日に一度、中隊本部に受領に行き食糧の現地調達はしたことはない。今から思えば、これが部落民が八路軍の手引きをしたり、自ら襲撃しなかった大きな原因に思えてならない。

二カ月近く、分哨勤務をやり南京の部隊に転属になった。中隊から二人の選出である。転出先は

支那派遣軍歩兵教育隊である。細部は承知していないが、見習士官、小隊長、中隊長、大隊長の再教育学校である。

四個中隊編成で他に機関銃隊、砲隊もあった。戦闘訓練の時は、分隊—小隊—中隊と型通り実施される。何しろ、見習士官以上ばかりで敬礼のしどおしで疲れ切ってしまった。

一カ月後、竹中中隊長の伝令になった。内務では当番である。中隊長の近くにいないくはということ、勤務は主として衛兵勤務である。週番上等兵もやり、命令の伝達をやる。南京で上等兵に進級したときは嬉しかった。食事は初年兵がやるが、いじわるな古兵が分配に口を出し随分苦労した。

南京で一年勤務し、済南に転属になった。昭和十七年十二月のことである。支那派遣軍歩兵教育隊済南隊で南京の学校と大同小異らしい。校長というか隊長というか、その長は、陸軍大佐佐三位勲三等・井上立樹陸軍大佐である。兵舎も南京よ

り規模が大きく、数個大隊に編成され佐官級の将校が多かった。

濟南は氣候がよく、内地と差があまりないように感じた。北京に近いただけあり治安もよく、鉄砲の音など聞こえない。

軍医大尉の当番を命じられ約一年余り勤務した。大尉は水にうるさく、煮沸、煮沸の毎日だった。佐官クラスはアパート式の官舎に住み、軍曹が炊事を賄っていた。昭和二十年一月末に中隊に復帰、演習、衛兵の明け暮れの毎日だった。空襲も敵襲もなく、戦闘の死角にいるような気がした。

八月十五日、ポツダム宣言受諾、濟南―上海間を貨物列車で一カ月かかって集結。米三升、砂糖、缶詰は濟南で支給になる。

昭和二十一年三月、博多へ上陸。三月十五日帰京。弟は海軍に志願、呉海兵団に勤務、昭和二十年九月に復員していた。

昭和二十一年十一月に結婚、娘が二人いる。一

人は同居しているが、一人は結婚して鹿児島にずっと住んでいる。

家内は平成十二（二〇〇〇）年に死去した。

内地の延長のような戦地勤務だったが、大戦争、大戦闘の中にもこのような勤務があったという事も軍隊の一面であろう。

和田山の街を歩いてもかつての兵隊仲間は見当たらず淋しい限りだ。

残り少ない余生を大事にしたいと思う。

行くも残るも悲惨

歩兵第三十一連隊の仲間

岩手県 菊池 政 男

私は、大正六（一九一七）年三月二十一日、岩手県金ケ崎町に農家の長男として生まれ、三度の